



子育て情報 6月号

平成 28 年 6 月
栢山女学園大学附属幼稚園

震災に学ぶ

園長 横尾 尚子

東日本大震災(平成 23 年 3 月 11 日)から 5 年が経ちました。しかし、テレビに映し出される被災地の様子は、まだまだ復興には程遠い状況を呈しています。それにもかかわらず、私の中で震災への関心が薄れてきていることにハタと気づかされた矢先の 4 月 14 日夜半、今度は熊本で大きな地震が起きました。

熊本は、母が独りで暮らす佐賀の隣県です。佐賀には特段の被害はなさそうでしたが、なかなか通じない電話の前で、独り暮らしの母の身を案じる時間はとても長く感じられました。「こんなことがあるから、そばになきゃダメなのよ」「残りの時間。やっぱり一緒に暮らそうよ」。やっと電話に出た母に向かって矢次ばやにそう繰り返しながら、「家族の絆」を強く感じずにはいられませんでした。

それからしばらくして、九州在住の親戚や友人の無事も確認でき、ひとまずホッとしたところへ懐かしい名前のメールが。名古屋短期大学在職中の教え子からのメールでした。「先生、クミコが熊本で被災して名古屋に戻ってきています。GWには益城へ帰るので、クミコを励ます会をしたいと思います。急なことで何人集まれるかわかりませんが、ぜひ参加してください」。こんな形で、熊本地震に直面することになるとうとは。急ぎフリーズドライ食品を袋に詰めて、待ち合わせ場所の金山駅へ行きました。そこには、子ども連れのママ集団が。36 歳になったゼミ生が 17 人中 13 人も揃っていました。カラオケルームで 3 時間。クミコが教えてくれた被災の詳細な現実。益城へ夫の転勤で移り住んで間もない被災で、子ども達を守るために名古屋へ避難してきたものの、余震が続く中、益城に残って地元の人と片付け作業をしている夫が心配でたまらないと泣き出しました。それでも、「みんなに会えて、元気をもらえて、石橋ゼミ(大学では旧姓使用)でよかった」と最後はうれし泣き。思わずみんなも、もらい泣き。かつてのゼミ生達を誇りに思い、「友達の絆」の美しさを知った午後でした。

とは言いつつも、今回の震災で改めて、私たちが住むこの日本は地震列島であり、いつ何時身近な所で災害が起きても不思議なことではない、という現実を突きつけられました。私達は日頃より、防災についての正しい知識を持ち、防災意識を高め、準備を怠らないよう努めなければならないのです。

今回(6 月 20 日)、PTA 主催の講演会として宮城県石巻市から佐藤敏郎先生をお迎えして、東日本大震災をふり返ります。この大震災で、石巻の大川小学校では 108 名の児童の内 74 名が犠牲となりました。佐藤先生も次女のみずほさん(当時 10 歳)を亡くされました。なぜ、これだけたくさんの命が失われたのでしょうか。5 年前のあの日、大川小学校で「なぜ大人は、教師は、子ども達の命を救えなかったのか」を自らの問題として問い直したいと思います。佐藤先生とのご縁は、学園本部事務局の池端さんがつくっていただきました。池端さんは東日本大震災の折、いち早くボランティアとして現地へ駆けつけ、栢山女学園大学の私達にもできるボランティア活動として「写真の水洗い作業」を提案・実践されました。津波に流され、泥まみれで発見されたアルバムや写真のかたまりから、細心の注意で一枚一枚写真をはがし取り、丁寧に水洗いして干し、新しいアルバムに戻してお返しするというものでした。洗濯ばさみで吊るされた夥しい数の写真。でもこの中には持ち主の手元に戻れない写真がある、そう考えると急に涙があふれてきて、しばらく作業ができなくなったことを思い出しました。昨年、その池端さんが佐藤先生をご紹介くださり、教育学部で学生向けにご講話いただきました。その DVD を PTA 役員さんがご覧くださり、今回の講演会へとつながりました。尊い命のともしびを守り続けていくために、私達一人ひとりにできることを、ご一緒に考えましょう。